

歴民だより

歴史民俗資料館

平成 29 年度 10 月号 No.48

息づく庶民の知恵

昔の民具 (安八町郷土資料庫 蔵)

えぶり 柄振



弥生時代～

つちなら

えぶり

水田で田植え前の土均しに用いる道具。杓とも書き、イボリ・エンブリ・シロナラシ・ノロヒキ・スルチャーなどさまざまな呼称がある。横長の板に T 字型に長柄をつけたもので、板の下部を

さらえじょう

波状に削ったものや数本の歯を埋め込んだ耙状のものがあり、高さ 15cm、幅 190cm 程の板をつけた大きなものもある。

びっちゅうくわ 備中鋤

二～六本の刃（歯）をもつ股鋤の総称。弥生時代、すでに木製の股鋤があり、古墳時代には鉄製のものもあった。備中鋤の名で呼ばれるようになるのは江戸時代になってからで、関東地方では文化・文政時代（一八〇四～三〇）ころから普及してといわれ、万能あるいはマンガ^{まんのう}と呼ばれた。湿気が多い土壌や粘土質の田畑を耕起する場合、平鋤だと刃床に土が付きやすいが、備中鋤は刃が金串状になっているので深耕しやすい。



弥生時代～

ハートピア安八

- 歴史民俗資料館 -

住所：岐阜県安八郡安八町氷取 30

お問合せ：0584-63-1515